

◆私の読書感想

齊藤治子『令嬢たちのロシア革命』

(岩波書店2011年4月刊 四六判314+7頁)

海老名市 下山房雄

研究会同人の皆さま

こんどは齊藤治子『令嬢たちのロシア革命』(岩波書店2011年4月刊 四六判314+7頁)を読みました。最後のモスクワ派と冷やかされていた故・大崎平八郎さんの組織したソ連旅行で一緒にしたこともある著者で(御夫君は私の学生時代の先輩的友人)、出版されて幾つかの書評が出た時から読もうと思っていた本です。

私のロシア史あるいは10月革命史のイメージは学生時代に安価なモスクワ発行の英語版ソ党史(ボ)——公式の党史は四つあるようですが、スターリン版です——を拾

い読みし、その後、ジョンリードの「10日間」（映画「レッド」も併せ）を読んで言うグチャグチャなものでしたが、それが多少は補正されました。

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/5016/1/KJ00000112943.pdf>

一番ショックだったのは、2月革命の臨時政府が3月に8時間労働制（7月には女性参政権！）を制定したことです。藤本先生受け売りで私は「1917年11月社会主義革命の直後、ソ連政府が世界最初の法制による全労働者対象の8時間労働制を実施した」などと書いてきたからです（「労働時間」平凡社1985年刊『大百科事典』15巻1071頁）。

そのことは描いて、本書の本筋を紹介しておきます。

「1917年のロシア革命に収斂した」「運動に人生をかけた令嬢たち」（はしがき p.30）「ロシア革命に参加し、自分たちの地平を切り開こうとした令嬢たち」（あとがき p.313）として取り上げられているのは、アリアドゥナ・ティルコワ、アレクサンドラ・コロンタイ、エレーナ・スターソワ、イネッサ・アルマンド、マリーヤ・スピリドノワの貴族出身五人です。ティルコワはカデット、スピリドノワはエスエルですから、ソ党史（ボ）の様なソ連史観に立てば革命家ではなくて反革命家です。しかし斉藤さんは、ロマノフ王朝ツァーの圧制に闘って民主化を成し遂げようとす

【読書】 齊藤治子『令嬢たちのロシア革命』（下山房雄）

る諸潮流を愛惜をこめて浮き彫りにしようとしています。

「歴史学と歴史小説の間のジャンル」を狙った (B&E) と書かれています。ロシア語文献が過半の注記は史学論文形式を整えています。レーニンとイネッサの性愛関係はいつ始まり何時終わったかを推論するような運びは小説形式を多少は意識しているものでしょう。

読んで損は無いです。薦めます。